

平成28年度 春日部共栄中学校

第1回 入学試験問題

午前入試・総合選抜

国語

(50分, 100点)

受験についての注意

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
2. 問題は ㊟・㊞・㊟ の3問です。
3. 解答は解答用紙（別紙）の所定の欄^{らん}に記入してください。
4. はじめに受験番号、氏名を解答用紙に必ず記入し、最後にもう一度^{かくにん}確認してください。
5. 解答用紙のみ回収します。

次の傍線を引いたカタカナの部分に漢字で書きなさい。

- ① 通りを出るとシカイが開けた。
- ② 海産物をユソウする。
- ③ 道路をカクチヨウする。
- ④ 自宅でタイキする。
- ⑤ 十万人をシュウヨウする競技場。
- ⑥ 母親の愛情をドクセンする。
- ⑦ ナナめ前を向く。
- ⑧ 大臣にシュウニンする。
- ⑨ ヘイボンな日々をすごす。
- ⑩ シンケンなまなざしを向ける。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ひっそりとした平日の美術館、Aあまり有名でない画家の展覧会場を想像していただきたい。一枚の絵の前にさきほどから男が一人、じつと立ちつくしている。中年の婦人が通りかかる。気がすまないうちに、せいぜい数秒、長くて十数秒もすれば、すぐまた歩き出せるように、傾けた姿勢のまま足をとめた。しかし眺め入っている男を視線の端にとらえると、あらためて画面に目をこらし、そろえた両足のあいだに重心を据えなおす。額縁だけが大きく、中には何も描かれていない。白い漆喰様のものが、ただ一面に塗りこめられているだけだ。もういちど男を盗み見る。こちらは魅せられたように身じろぎもしない。何を見ているのだろう。自分には見えない何かが見えるのだろうか。男に見えているものが、自分にだけは見えないのだろうか。目をこらす。

へ ア へ

かなり間があつてから、婦人は悲鳴をあげて後じさった。やっと気付いたのだ。隣の男は本物の人間ではなかったのだ。白い画面の部分、もしくは延長として、本物そっくりに作られた彫刻だったのである。モデルに選ばれるほどの個性はなく、服装も体型も年のころもすべて平均的で、おまけに着色までされていた。驚いたのも無理はない。ただの見物人のつもりが、人形といつしよにB絵の一部にはめ込まれてしまったのである。見えるけど触れられないホログラム（実体映像）の中に迷い込んだような体験だったにちがいない。

このそっくり人形は、たぶん七〇年代のはじめ、アメリカを中心におきたスーパー・リアリズムの流れを汲むものだ。実物とまぎらわしいほどの写真にある種の衝撃力がそなわっていることは否定できない。しかしそれが美術の名に値するかどうかは、また別問題である。たとえば料理店の入り口に並べられた蠟細工の見本、毎度のことながら感心させられても、感動させられることはまずありえない。スーパー・リアリズムも今でこそ市民権を得て、美術館入りをはたした作品も少くないが、出始めのころはやはり世間の眉をひそめさせたものである。へ イ へ

細部の描写だけなら、なにも今に始まったことではない。中国や日本は例外として、近代以前のヨーロッパ、とくにルネッサンス期には写真がむしろ重んじられた。遠近法なども採用され、もっぱら見るといふ行為の客体化が追求される。写真の発明をうな

がす衝動もこの時点で準備されたと考えていいはずだ。現に暗室の壁に穴をあけ、反対側にうつした倒立像を絵筆でなぞった画家もいたと聞く。現像定着という化学処理が発明される以前の手作り写真である。

ところが近代に入って、いよいよ写真の実用時代を迎えても、写真が美術の主流を占めるような事態にはならなかった。

〔C〕美術の写真離れがはじまる。現実の剥製であることをやめ、描写が表現に席をゆずりはじめたと言ってもいいだろう。

考えてみると、もともと細部の再現だけが写真の目的だったわけではなく、主題を表現するための手段だったのだから、いったん写真離れがはじまると後は早かった。技法はますます自由になり、奔放になり、やがては抽象画からアクション・ペインティングへまでの道を走り続ける。ヘ　ウ　　

そうした近代絵画の流れにさからうようにしてスーパー・リアリズムが出現する。表現を無視し、写真のようにひたすら細部に執着する。なかには実際に写真に着色したり、モデルを洋服ごと石膏で型取りしたりする例もあるらしい。表現主義に対するパロディなのだろうか。近代絵画の流れを変えるとまでは思えないが、すくなくも流れを乱す杭くらいの効果は認めてやるべきだろう。では写真とスーパー・リアリズムのあいだに、どんな違いがあるのだろうか。最初に書いた美術館のそっくり人形は、見物の婦人に悲鳴をあげさせたが、写真でも同じことが起こりうるだろうか。カラーの実体写真が実現すればたぶん可能だろう。その限りでは、さしたる区別はなさそうである。

だがその先を考えると、明白な違いがでてくる。そっくり人形は、見物人を刺激し混乱させようという作者の意図さえみれば、それ以上の細部は必要としない。写真のほうは、作者がかならずしも意図しなかった細部の情報までふくんでいて、受け手の解析能力に応じた情報を提供してくれる。レンズの解像力がすぐれていれば、それだけ情報の量も多くなる。うまくすれば被写体の指紋を拡大し、前科の有無を調べることだって不可能ではないはずだ。ヘ　エ　　

つまり情報の《質》としては、写真もそっくり人形も似たようなのだが、《量》に関しては本質的なひらきがあると言うことである。〔D〕^{※5}ボージャーから送られてきた土星の写真には、コンピュータで数か月にもわたって分析しなければならぬほどの情報が詰め込まれている。いくらそっくりに似せても、描いた絵ではなんの情報源にもなりえない。せいぜいテレビの科学番

組の背景として役立つぐらいのものだろう。

だからと言って、写真の情報がまったく質を問われないというわけではない。たとえばすぐれた報道写真は、しばしばその情報の質で忘れがたいものになる。しかし今さら質にこだわる必要はないような気もするのだ。構図がどうの、コントラストがどうのといった造形主義的な批評や評価に甘んじているかぎり、そっくり人形に対する画家たちの嘲りは、そのまま写真にはね返らざるを得まい。写真はそっくり人形の代用から早く脱皮し、美術の亜流であることをやめて、情報の圧倒的な優位性を自覚すべきなのだ。画家たちが、そっくり人形は写真にまかせようと言いつづけるなら、写真家は言い返してほしい、そっくり人形こそ画家たちにまかせようと。

（安部公房『死に急ぐ鯨たち』より）

※1 ホログラム：レーザー光線を使って記録した立体映像。ここでは、実物のように感じられる映像のこと。

※2 スーパー・リアリズム：超写実主義。抽象主義表現の対極として現れた。

※3 ルネッサンス：十四～十六世紀にイタリアを中心としてヨーロッパに広がった、学問・芸術・文化の革新運動。

※4 アクション・ペインティング：第二次世界大戦後にアメリカを中心に起こった抽象絵画の傾向。絵を描くという行為自体を重視。

※5 ボイジャー：アメリカの無人惑星探査機。一九七七年に二機打ち上げられた。

問一　　部1「延長」と同じ組み立ての二字熟語として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 再現　　イ 混乱　　ウ 明暗　　エ 補強

問二

- ~~~~部 1

A	D
---	---

 に入ることばの組み合わせとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 〔 A もしくは B たとえば C いきなり D むしろ 〕
- イ 〔 A もしくは B いきなり C むしろ D たとえば 〕
- ウ 〔 A たとえば B もしくは C むしろ D いきなり 〕
- エ 〔 A いきなり B むしろ C もしくは D たとえば 〕

問三

~~~~部 2 「実物とまぎらわしいほどの……また別問題である」と筆者が考えるのはなぜですか。その理由を問題文中のことばを使って、四十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問四

~~~~部 3 「もっぱら見るという行為の客体化が追求される」とはどういうことですか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間にはどう見えているのかということに、どこまで近づけるかを追い求めようとしていること。
- イ 人間の見るという主體的な動作よりも、他者にどう見られるのかを重要視しようとしていること。
- ウ 人間の見るという行動を平面的ではなく、できうる限り立体的にとらえ直そうとしていること。
- エ 人間が意識的に見るのではなく、自然と目に映る状態のものだけを問題視しようとしていること。

問五

~~~~部 4 「写真とスーパー・リアリズムのあいだに、どんな違いがあるのだろう」について、筆者はどう考えているか。問題文中のことばを使って、五十字以内で説明しなさい。ただし、「前者は……、後者は……」という形でまとめなさい。(句読点も字数にふくみます)

問六

~~~~部 5 「そっくりに似せ」られた作品」という意味になることばを、~~~~部 5 より後の問題文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問七

問題文中には、次の一文が抜けています。ヘア<ヘエ<のどこに入るのが適当ですか、記号で答えなさい。
【それは画くという行為そのものへの問い掛けでもあった。】

問八

問題文中で筆者は「写真」の持つ最大の利点を何だと考えていますか。問題文中から十字で抜き出して答えなさい。

次の文章はフォルクローレという民族音楽の演奏家である「僕」と「室井」が、クリスマスに浜松の病院からコンサートへの依頼を受けて行き、病院の患者とスタッフの前で楽器を演奏する様子を描いた場面です。これを読んで、後の問に答えなさい。

僕は、呆然とベッドを見渡した。

ベッドの上の患者さん達は、誰も僕らに関心を示してはいないように見えた。

僕らにだけじゃなくて、この世のすべてのものに無関心なように見えた。

「あの……、これ……」

室井が婦長さんを振り返って A。

「びっくりしたかしら。ごらんの通り、この方たち、みなさん植物のような状態なの」

「植物……状態？」

婦長さんは、ごくごくあたりまえの口調で笑いながら言った。

「そう。みなさん寝たきりの方々。目も見えないし、耳も聞こえないし、体を動かすこともできない……って、言われてる人たちの。でもね、本当はどうなのか、誰にもわからない。そうでしょ、実は聞こえているけど応えることができないだけかもしれない。見えているけれど表現できないだけなのかもしれない。誰にもわからない。でもね、たとえ体のすべての機能が奪われ、意識が無いように見えたとしても、こうして生きているってことは何かを感じてるってことじゃないか、って私は思うのよ。そう信じてるの。あなた方はどう思われます？」

「どう思うと聞かれても、うまく答えられなかった。」

僕は、正直言って、ちょっと怖かった。その人たちは、確かに普通の人間とは違う印象を与えていた。なんていうか……作りモノみたいだった。魂の抜けた人間って感じだったのだ。

「たとえば、この方。ササキさんっていうの。彼ね、もう大脳が萎縮していて、何も感じる事ができないって言われてる。CT

で見ると脳がスポンジみたいにスカスカなの。だけどね、不思議なのよ、知らない人が病室にやってくると、うぶ毛が逆立つのよ、いまも、ほら！」

確かに、静電気が起きたみたいに、腕のうぶ毛が立っている。

「あるとき発見したの。彼のうぶ毛、他人に反応するってこと」

婦長さんはササキさんの手をとっても優しくさすった。彼女がササキさんに触れるしぐさを見ていたら、なぜかササキさんが人間に思えてきた。

「この人ね、マリコさんっていうんだけど、笛の音が大好きなの。ちょっと、その笛、吹いてみてくれないかしら」

僕は言われるままに、ピーとケーナを鳴らした。

「ほら、笛の音を聞くと、まっげがかすかに痙攣するでしょう。彼女ね、こうなる前はフルート奏者だったの。四十三歳の時に演奏旅行中に交通事故にあって、脳を破損してしまったの。でも、笛の音はわかるのよ。笛の音にだけは反応するの。きつと体の細胞が笛の音色を記憶しているんだわ」

マリコさんと呼ばれた女性の年を、僕は全く判断できなかった。表情のない顔の年ってわからない。白髪をおさげに結んだマリコさんの皮膚は、黄ばんでいたけど妙につるつると光沢があった。彼女は目を見開いたままベッドの上に無表情に座っていた。時折、口元が痙攣したように歪むけれど、それは単なる筋肉の不随意運動なのだそうだ。喉に穴をあけて、そこから息をしている。喉の風穴がひゅうひゅうと鳴っていた。

「この病院は、こういう方達を受け入れる病院なの。なんと説明したらいいかしら。治療する場所ではなくて、人生の最期の場所となるための病院なの」

婦長さんはマリコさんのよだれを丁寧にぬぐった。

「演奏して、いただけるかしら？」

振り向いた彼女は天使のようだった。僕は絶対にこの笑顔に背ける人間はいないって思った。

「じゃ、じゃあ、始めるか？」

室井が僕を見る。

「うん」

練習してきた通りに、そろっておじぎをすると、再び拍手が起こった。

他のフロアからも手のあいた看護婦さんやお医者さんらしき人々が集まって来ていた。が、結局のところ、僕は聴衆なんてどうでもいいのだ。

たとえ聴き手が花や木だって、犬だって、猫だって、カンガル―だってかまわない。こうして演奏できることが楽しいから、だからこの仕事を続けているのだ。

まずは、チャランゴとケーナの合奏。テンポの早い曲を三曲続けて、それから、ギターとボーカルの静かな曲に切り替える。合間に室井がフォルクローレ音楽について、冗談を交えながら解説する。

僕のギターソロ二曲。

そしてまた、チャランゴとケーナ。

そして、最後の曲は「花祭」。

室井のチャランゴは過激だ。楽器をぶっ壊すかと思うほど力ずくで弦をかき鳴らす。僕はチャランゴに合わせながらケーナを吹く。だんだんと自分の体が浮き上がっていくのを感じる。酸素が足りなくなるからかもしれない。

ケーナという楽器は見たためよりずっと肺活量が必要とするんだ。だから、どんどん昇りつめていくと酸欠で気絶しそうになる。

※³あの、砂丘の波のテンポを僕は思い出していた。

上昇気流に乗せて、この笛の音を天上まで届けたい、その強い欲求が僕の中で竜巻みたいに沸き上がって、何かが意識のドアを

激しくノックする。

もつともつと上まで音を届けたい。音は僕にとって魂だ。すべての魂を音に乗せて天上へ飛翔させたい、それが僕の唯一の望みだ。

何かがやってくる。音楽の神様がやってくる。それを僕は待っている。さあ来い、来い、来い。神様、どうか僕に降りて来て。

僕は何もいりません、ただあなたと踊りたい。

ノックの音はさらに強く激しく僕を揺さぶる。

開くぞ、開くぞ……そう思ったとたんにはーんと扉が弾け飛んで、体がふわあつと軽くなった。

すごく暖かな光を感じた。

気がつくと、僕のまわりに、たくさんの人たちが集まって、踊ってる。

人間の輪郭をした光。輝き浮遊し飛び回る人型。楽しそうだ。みんな、自由になれてとっても喜んでいるのが伝わってくる。無数の光が輪を描いてくると乱舞している。そうだ、肉体なんて捨てて自由に踊ればいい。音楽は魂を自由にするのさ。フォルクローレは魂の音楽だもの。

いつしか僕らは音楽に合わせて姿を変える。鷺に、花に、そしてコンドルに……。空を飛び、地を駆け、そして夕闇に眠るすべての自然となる。人間であることをやめたら、こんなに自由だ。

室井の掛け声に、僕はさらに激しく息を吹き指を動かす。

いま僕の体そのものが一本の笛となる。

チャランゴの最後のひとかき。その和音の振動が消えて、僕らの演奏は終わった。

鼓動が膨張してゐる。静寂。

たくさんさんの精霊が地に戻っていく。音楽は魂を揺るがす振動。演奏が終わると魂はそれぞれの形のなかへと静かに戻っている。

目を開くと、拍手が起こった。とっても長い、優しい拍手だった。

「婦長、マリコさん、これ涙じゃないかしら」

一人の看護婦さんが、声をあげた。

婦長さんが駆け寄って、マリコさんの目頭をひとさし指でなぞってから、彼女の小さな頭を抱きしめた。

「ほらね、わかるのよ。感じるのよ」

自分に言い聞かせるみたいに、婦長さんがつぶやいた。

ああ、きっとこの人は、ときおり不安を感じながら、それでも魂の力を信じよう信じてうって、そうやって生きているんだなあって思った。きつと、このセントマリア病院に働くみんなにとって、マリコさんの一粒にも満たない涙が、最高のクリスマスプレゼントなんだな、って思えた。おもしろいよな、人生って。与えてる人たちが、実は与えられるんだな。うまくできてる。

僕は、看護婦さんたちに見送られて、病院を後にした。みんな並んで手を振ってくれた。

「これ、帰りの電車の中でどうぞ」
って、おみやげの紙袋をもらった。

すっかり雪をかぶった病院は、なんだか大きな教会みたいに見えたつけ。

(田口ランディ『クリスマスの仕事』より)

※1 痙攣：筋肉がひきつること。

※2 不随意運動：自分の意志によるものではない動き。

※3 あの、砂丘の波のテンポ：病院に来る前に室井と寄った、浜松砂丘で見た光景。

※4 膨張：ふくれて大きくなること。

問一

A に入る適当なことを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 口止めた イ 口ごもった ウ 口をすべらせた エ 口走った

問二

部1「どう思うと…答えられなかった」における「僕」の気持ちの説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A ベッドの上の患者はとうてい生きているように見えず、それを意識があるという婦長に恐怖を覚えている。
イ 患者に自分の声が聞こえているのではないかと思い、正直な感想を伝えることが恥ずかしいと感じている。
ウ これまで体験したことのないことに直面し、素直な自分の気持ちを伝えていいものかどうか戸惑っている。
エ 婦長や患者に対するさまざまな思いがあふれて来て、何から話してよいものかわからず途方に暮れている。

問三

部2「僕は絶対に…思った」における「僕」の気持ちの説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 婦長さんの笑顔は厳しい環境の中でも楽しく働くために身につけたものであろうと彼女に同情している。
イ 婦長さんの笑顔は周囲に対しての威圧を感じさせるものであり、彼女の気持ちの強さに圧倒されている。
ウ 婦長さんの笑顔は誰にでも向けられる社交辞令的なものであり、彼女の上辺だけの態度に困惑している。
エ 婦長さんの笑顔は患者に対する慈愛にあふれており、その純粋でまっすぐな気持ちに胸を打たれている。

問四 〰部3「ほど」と同じ用法をふくむ例文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母はほどなく参りますのでお待ちください。
- イ お皿にはお菓子がまだ五つほど残っていた。
- ウ 人形は見れば見るほど本人によく似ている。
- エ 彼は身のほどをわきまえない行動をとった。

問五 〰部4「不安を感じながら」とありますが、どのような不安ですか。四十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問六 〰部5「与えてる人たちが、実は与えられるんだな」とは具体的にどういうことですか。五十字以内で説明しなさい。(句読点も字数にふくみます)

問七 〰部6「大きな教会みたいに見えた」とありますが、「大きな教会」が表しているものとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 喜びにあふれる場所
- イ 人生の終着点
- ウ 悲しみの象徴^{しょうちよう}
- エ 全てを受けいれるところ

